

帳御心當茂違候條、向後致死去候はゞ早速可申上候事。遺物之儀は追而可差上候事。右之通被仰渡何茂退出也。

卯三月廿五日

六 組中行狀之儀に付被仰渡覺

組中之者共之儀、先年茂相尋候而頭々紙面を以達聽候。其以後行狀相嗜候もの茂可有之候。亦最前指而及見聞候儀無之もの茂、心底怠り作法取みだし候者も可有之候。連々見聞之趣有躰書付可入披見候。但、於此儀は同役中聊不申談、面々存知之通眞直に言達尤に候。若諸人も及見聞儀、於無其儀者可爲越度候。以上。

(年不詳)
九月十六日

御別紙

追而先年達聽候者共不殘書付、其以後之様子委細言達尤に候。其外之面々茂、善惡共並に越候もの共、無遠慮可達聽候。且又重病或亂心に而、決而奉公難叶輩可有言上候。以

上。

十六日

七 組中之儀被仰渡御條目

元祿三年六月廿八日以奥村伊豫被渡下候御條目

覺

一、組中之儀に付而、度々申渡候趣、會而其しるし無之候。いかゞ相心得候哉之事。
一、今度火事に付組頭心得肝要に候。先年拜借申付候時分、除知仕面々、上納辨銀相濟候共しばらく除置、不時入用之金銀相應に可嗜之旨申渡候。此趣頭々相守候はゞ、火事之御當分飯米以下は各別、以後家作等之儀は滞間敷候。然共先年拜借不申付者共、其たしなみ油斷仕、諸事相滯者候はゞ、頭々吟味之上可致言上候。假令先々拜借之者共候とも、其故有之而勝手困窮之者は、是亦可爲同前事。

一、組中若作法不宜者候はゞ、急度加異見、自然申聞處兩三度におよび候ても不致承引、不行儀之族は可達聽之由、先年申渡候。其以後頭々誓詞申付候時分も、其趣書載之

候。然處連々不行儀之者共有之躰に相聞候。尤一兩年以來之儀に而無之候間、及數度可加異見候哉。左様候上は、必定言上可仕之處、其儀無之候。如何相心得候哉之事。

一、先年より有來簡略之定令用捨候時分如申出、簡略を存ながら私として難任其意品可有之事に候間、自今以後猶以頭々申談之定置べく候。若無仔細組頭之差圖を不用もの候はゞ、其砌茂申渡通無用捨可致言上事。

一、組頭之面々別而心底を嗜、内外作法およびざるまでも、組中のならはしにも罷成候様心懸、全私之榮耀をやめ、專業業を上げみ、萬端慎をむねと致し、油斷有間敷之旨、先年申合候。其以來令見聞候處、行跡相違之輩有之候。急度可相嗜候。若其心懸於無之は可處越度事。

午六月廿六日

八 於蓮池御殿被仰渡に付

組頭請書

元祿九年八月十五日於蓮池御殿、藤田半兵衛・山崎源五左衛門・永井織部・津田求馬・半田惣兵衛・野村五郎兵

衛・伴源兵衛御前被召出、御直に被仰渡候趣、其以後書付可指上旨被仰出に付、平兵衛・織部より上之候紙面之寫

組中彌無油斷指引可仕候。只今迄上ゆるかせに候故、作法不宜者少々有之由御聞及被成候。其故奉行迄油斷有之候。

先年被仰出、組中不作法之者有之候はゞ、異見を加へ可申候。承引仕者は其通に候得共、左様之者は異見茂不用もの候。左様之者其分に差置候ては、頭々申聞専も無之事に候。左候得ば流例之様罷成候。隨分に心に懸、不行儀もの制詞を加へ、不改者は可達御聽候。異見を不用もの、何卒了簡有之は各別、左もなく言上不仕候はゞ、直に従御前御吟味被遊儀可有之候。左様之節は、頭々殊之外越度に可罷成候。不作法者御用捨被遊置候而は、次第に人數多、御仕置被仰付候もの數多罷成候段、如何敷被思召候。委敷御聞被遊候得者、不行跡之者大勢有之由に候。先年より兩三度御貸銀等被仰付候得共、其内少々は勝手仕直候ものも有之躰候へども、大半は其印も無之、勝手仕損、元之通之者有之躰に候。勝手仕損候へば、心ならず不作法之族も出來申